

初めて聴くかたに『メサイア』はやわかり

山野 雄大

★ヘンデルはなぜ「オラトリオ」を書いたのか？

『メサイア(救世主)』を書いたドイツ生まれの作曲家ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデル(1685～1759)は、おなじみヨハン・セバスティアン・バッハと並ぶ「バロック音楽」最大級の作曲家だ(ちなみにふたりは同じ年にひと月ほど違いで近いところに生まれている。交友はなかったが最晩年に同じ眼科医にかかり、皮肉にも兩人とも手術は失敗)。

音楽家一族の出身だったバッハと対照的に、ヘンデルは音楽とは無縁の家庭に育った。刻苦勉強のうちに音楽を学び、オペラ作曲家として大成功を収める。やがてイタリアへ渡り、多くの芸術家との交流で音楽に磨きをかけ……1710年には大陸を離れてイギリスへ。ここでもオペラは大成功、国王のために有名な『水上の音楽』を書くほか教会音楽の作曲など名声を手にして、1727年にはこの国に帰化している(イギリスでは「ジョージ・フリデリック・ハンデル」と英語読みして自国の作曲家として扱う)。

ところが、オペラ興行界は安泰を許さない。やがてライヴアルも登場、因習を越えて作劇にもあれこれ工夫を重ねたヘンデル作品は時代を先走りすぎたか、興行の失敗も重ねてゆく。熾烈な覇権争いにヘンデルの時代も終わったと噂されるが……彼は「オラトリオ」の世界を新たに切りひらきつつあった。

★ヘンデルの「オラトリオ」とはどんなもの？

むかしはオラトリオを「^{せいたん}聖譚曲」と訳したそうで、なるほど辞典などをみると「宗教的な題材による音楽作品」の中でも「大規模な叙事的楽曲(=できごとを物語ってゆくような音楽)で、独唱や合唱、オーケストラを用いて劇的な音楽をつくり、動作や背景・衣裳などはつかわない」ものを指す。演技のつくオペラとは違うわけだ。

なかでもヘンデルが(分類にもよるが)26曲残したオラトリオは、聖書など宗教的なものからギリシャ神話を題材にしたものまで、言葉と音楽の緊密な結びつきのなかに人間ドラマを深く描き出す劇場作品として追求されたもの。オペラのように舞台上の演技がないぶん、演奏家も聴き手も「言葉と音楽」に集中することができるわけだ。ヘンデルにとって、舞台のドラマ性と洗練された音楽と言葉とが融合して生まれるオラトリオは、オペラ

で鍛えた腕をいよいよ発揮できる格好の世界でもあった。

詳しいことは、三澤寿喜さんが書かれた『作曲家◎人と作品 ヘンデル』[音楽之友社／2007年]という分かりやすく中身の濃い本をお読みいただきたいが、オラトリオの場合、合唱がとても大きな役割を果たしてゆくのも特徴。前掲書で三澤さんは「極論すれば、ヘンデル・オラトリオは独唱を中心とするイタリアのオペラ文化と、合唱を中心とするイギリスのアンセム文化を理想的な形で一体化したもの」と明快に述べておられるし、ある意味で当時の(あれこれ細かい制約のあった)オペラより緊密な世界を創り出すことができるのだ。

ヘンデルは起死回生を賭けてオラトリオに取り組んでゆく。

★『メサイア』の巧みと明快

1741年、オペラの行き詰まりで失意の底にあったヘンデルのもとに、アイルランド総督カヴェンディッシュからダブリンでの演奏会の依頼があった。折しも手元には、友人ジェネズが聖書から織りあげた新作テキストがある。ヘンデルは猛然と作曲にとりかかり……なんと24日間で大作オラトリオ『メサイア』を完成させてしまった。部屋に閉じこもって食事にも手をつけない日が続き、ときに祈りと共に涙を流しながら作曲したという伝説もあるけれど、何はともあれ猛烈な速筆だ。

1742年4月13日、世界初演は大成功を収めた。前もって行われた公開リハーサルの時点から話題沸騰、当時の新聞には「ご婦人はフープなしで、殿方は剣なしで来場されたし」という記事が出たほどだったが、それでも会場はすし詰め、満場の聴衆はこの大作に深く心うたれた。ロンドンに戻っての上演(翌年3月)は、聖句を劇場で上演することへの抵抗感がまだ強く失敗に終わるが、ヘンデルはその後も不屈の創作活動を展開して数々の大作・傑作を生んでいき、やがて『メサイア』の素晴らしさも広く受け入れられてゆく。

なにしろこの『メサイア』、大作にもかかわらず自然にすっと入れるわかりやすさを持っているのだ。ジェネズが膨大な厚さを持つ旧約・新訳聖書から編纂した台本は、イエス降誕の予言から受難、死後の復活までを巧みな構成で描き、明快。しかもテキストは物語性を前面に押し出さず、主人公格の人物が登場するわけでもない。歌手が劇的人物を演じるのではなく聖書のことばが歌われてゆくのだから、主人公は信仰であり、聴く人でもある。

そして、その濃い内容を音楽が見事に響きひろげてゆく。独唱におけるアリア(詠唱)とレチタティーヴォ(叙唱=旋律よりも歌詞を重視した朗唱)の組み合わせ、それに合唱・

オーケストラの混合も言葉に応じて工夫され、あるいは全体の組み立てのなかで起伏のバランスも緻密にはかられている。聴く者は、飽きることなくひきつけられ、歌われる内容に心ひらき、壮大な昂揚へと連れてゆかれるのだ。

★『メサイア』のくみたち

聴き進めれば内容も自然にお分かりかとは思うけれど、初めてのカタ向けに『メサイア』のくみたちをごく簡単に概観しておこう。

【第1部】は、イエス・キリストの降誕に関する神の預言を扱う。オーケストラによるシンフォニアが序曲として奏されたのち、旧約聖書における預言のことばが語られる。合唱がイエス降誕を歌い、途中には「ピファ(田園曲)」としてオーケストラのみの平和な音楽も挿入される(ヘンデルがイタリア時代以来愛好したシチリアーナ舞曲を基とするもので、ピファはイタリアの楽器の名前に由来する名称)。新訳聖書から荒野の羊飼いたちの挿話も登場、最後に合唱が「くびき(牛や馬が車をひく時にかかる横木)は負いやすく、荷は軽い」とマタイ福音書からのテキストを歌って清明な第1部を閉じる。

【第2部】はイエス・キリストの受難と復活を扱う。福音の勝利を描くこの部分は第1部に比べてより劇的、音楽も緊張感を高める。イエスは人に侮辱を受けるが、人の病を、人の悲しみを背負い、その傷によって人は癒される。昇天、復活……。音楽は光に満たされ、高らかな合唱が福音の伝達を語る。合唱が現す群衆の声が第2部をいよいよ昂揚させ、決然たるアリアに続いて遂に「ハレルヤ・コーラス」。テキストはヨハネ黙示録から。

【第3部】は来るべきイエスの再臨、勝利を扱う。「私をあがなう者は生きておられる」と穏やかで柔らかな光を帯びたアリアと、それを囁みしめるような厳粛な合唱。「キリストによって全ての人が生かされる……」トランペットの吹奏とともに死者の甦りが歌われる。聖書のことばは成就する。神は救いをもたらすのだ。終曲はヨハネ黙示録のテキストによる合唱から。最後に祈りをしめくくる「アーメン・コーラス」が巨大な音の伽藍を築き上げ、雄大なフーガの中に音楽は最後の頂点を迎える……。

ところで、この作品は上演のたびにヘンデルが楽器編成に手を加え(当時は演奏される都市や会場によって演奏状況が異なるのは普通だった)、曲によっては大きく書き直したりと、楽譜のヴァージョンが本当にたくさん存在する。詳細にご興味あるかたは専門書にあたられたい。

(やまの たけひろ・ライター〈音楽・舞踊評論〉)